

「底が突き抜けた」時代の歩き方 361

Try to remember more than ever

「トライ・トゥ・リメンバー」は「思い出そうとしてみて」、「モア・ザン・エヴァ」は「ますます」、または「前よりいっそう」だから、「トライ・トゥ・リメンバー・モア・ザン・エヴァ」は「ますます思い出そうとしてみて」か、「前よりいっそう思い出そうとしてみて」という訳になるだろう。『トライ・トゥ・リメンバー』という美しい曲があり、その言葉に「モア・ザン・エヴァ」をくっつけたのだが、こちらの思いでは、なにかを思い出そうとしてみて、あるいは、あることを思い出そうとしてみて、であったり、これまで一度も思ってもみなかったことを思い出そうとしてみて、という意を含ませている。「トライ・トゥ・リメンバー」という言葉については、作家の橋本治が小冊子『ちくま』(03・1)にこう記している。

《今でも上演されているミュージカルの『ラ・マンチャの男』がブロードウェイで初演されたのは1965年のことで、私は17歳だった。これが日本で上演されるのはまだ後のことだけでも、その前にブロードウェイのオリジナルキャスト盤のレコードだけが日本でも発売された。私はそれを買って、まだ暗記力が旺盛だったので、中の歌をほとんど全部覚えてしまった。

セルバンテスが牢屋に入れられて、そこで囚人達を相手に自分の書いた『ドン・キホーテ』というのがどういう作品かを語って、それが劇中劇のミュージカルになって行く。ドン・キホーテが、アルドンサという酒場のあばずれ女に会って、彼女をいきなり「貴婦人ドルシネア」と思い込み、初めはそれをバカにしていたアルドンサが、いつの間にか自分の中に眠っている「貴婦人でもあるような自分の本質」を呼び覚まされる。ところが、そのドン・キホーテは病に倒れて、「自分は所詮非現実の妄想の中にしか生きていなかった」と自覚する - だから、やって来たアルドンサのことも「覚えていない」と拒絶してしまう。その臨終のドン・キホーテに向かってアルドンサは、
プリーズ・サー トライ・トゥ・リメンバー ユー・ルック・アット・ミー アンド コール・ミー・バイ・アナザー・ネーム
「お願い旦那様、思い出して、あなたは私を見て、違う名前で呼んだの」と呼びかける。それでドン・キホーテは、自分の人生が妄想の塊りであっても、それが人にとってはなにか意味のあることだったと気づいて、最後の力をふりしぼって立ち上がる - そして死んでしまって、最後の有名な『見果てぬ夢』の大合唱に続いて行くんだけど、十代の終わりの私にとって一番印象に残ったのは、アルドンサの語りかける“Try to remember”の一言だった。》

橋本治はそして、「『思い出せ』と言われたって、一番重要な記憶はそう簡単に出て来

ない。「なにが一番重要なのか」という、根本原則を曖昧にさせてしまうことこそが、「生きる」ということの実態だったりもする。(中略)「トライ・トゥー - 、だから難しいんだな」と、十代の終わり頃に思っていて、「ある程度の豊かさが達成されるということは、`大切なこと`を犠牲にすることでもあって、だからこそ、豊かさのレベルに届いたら、`思い出してみて`の働きかけが生まれるんだな。自分はそんな時代に生きているんだな - いるはずなんだな」とは思ったけれども、日本の社会は、そこからやっとなら「豊かさの達成へと向かって動き出す」を始めたらしい。ということになると、私は現実から20年ずれている。》と続ける。

生きていくことは忘れていくことである。忘れていくことの塊が生きていくことをたえず促しているといつてよい。ところが、人間という存在は、忘れっ放しのまま自分の生涯を終えるようにはどうやらできていないらしい。忘れて忘れて歩を進めてきたことは、必ず曲がり角に直面するようになっている。もうそのままでは突っ走れなくなっているのだ。そのとき、人間は自分の曲がり角から呼び止められる。その呼びかけのなかに、`思い出してみて`の声が必ず含まれている。しかし、忘れてきた人生が`思い出してみる`ことがあるだろうか。同時に、一体、なにを`思い出してみる`ことができるのだろう。「トライ・トゥー - 、だから難しいんだな」と、彼と同じことを呟かざるをえなくなる。それでも、「トライ・トゥー・リメンバー」の声が聞こえる者は幸いである。その声に立ち止まる者はもっと幸いである。なぜなら、今後その声に育まれていく人生が自分の前にひらかれているだろうからだ。

「トライ・トゥー・リメンバー」の興味深さはだが、そのことにとどまらない。橋本治が簡単に触れている『ドン・キホーテ』の中に、より多く含まれているのが感じられる。その記述では、「トライ・トゥー・リメンバー」の呼びかけは、アルドンサの臨終のドン・キホーテに対するものであったが、その前に、《ドン・キホーテが、アルドンサという酒場のあばずれ女に会って、彼女をいきなり「貴婦人ドルシネア」と思い込》んで、「あなたは私を見て、違う名前と呼んだ」、そのこと自体が、「トライ・トゥー・リメンバー」であったことに気づく。ドン・キホーテは酒場のあばずれ女に向かって、`あなたはこんなところで下品な男どもの相手をしているような女性ではない、あなたはもっと気高く誇らかな女性なのだ`というようなことをいって、彼女がもし「貴婦人でもあるような自分の本質」を呼び覚まされたとすれば、彼女は確かにドン・キホーテから「トライ・トゥー・リメンバー」を呼びかけられたにちがいないのだ。

アルドンサも元から「酒場のあばずれ女」であったわけではない。元からの守銭奴や極悪人が存在していたわけではないように、だ。彼女も人生の天変地異を味わった挙句、ドン・キホーテの前にしがない「酒場のあばずれ女」として現れていたのだ。ところが、ドン・キホーテの眼には彼女が「貴婦人ドルシネア」と重なってみえたために、彼女は「貴婦人ドルシネア」として扱われるようになる。酒場のあばずれ女はどこからみても

酒場のあばずれ女でしかなく、大半の人々は酒場のあばずれ女として接するのが現実であるのに、ドン・キホーテは酒場のあばずれ女に貴婦人として接するのだ。当然、人々はドン・キホーテを現実を見ない、「所詮非現実の妄想の中にしか生きていな」い人物として嘲笑する。このとき、もしドン・キホーテが人々の嘲笑に気づかずに、自分の妄想の中でのみ生きている人物であったなら、なるほど彼は単なる狂人であったかもしれない。

《ところが、そのドン・キホーテは病に倒れて、「自分は所詮非現実の妄想の中にしか生きていなかった」と自覚する》という文脈からすれば、彼は自分に対する人々の嘲笑を知りながら、自分の眼には酒場のあばずれ女が貴婦人としかみえないように生きてきていることがわかる。自分にはどうしてもそのようにしかみえない。だから、彼は酒場のあばずれ女アルドンサに向かって、「貴婦人ドルシネア」の名で呼び続けた。周囲も当然のアルドンサ自身もそんな彼を嗤いつづけて、相手にしなかった。彼が病に倒れたということは、彼にはそうみえてきたことがそうみえてきただけのことであって、遂になんの揺らぎも現実に惹き起こさなかったということの意味する。つまり、「自分は所詮非現実の妄想の中にしか生きていなかった」と自覚するに至る。あるがままの現実が異なってみえる通りに生きてきたことがなんの変化ももたらさなかったのだ。

いうまでもなくここで、ドン・キホーテとは作者セルバンテス自身にほかならない。作品を産みだすことは、酒場のあばずれ女を貴婦人と思い込みつづけることだからだ。いいかえると、多くの人にみえている現実の表皮を剥ぎ取って、そこから別の現実を引き出してくることだからだ。したがって、ドン・キホーテが「自分は所詮非現実の妄想の中にしか生きていなかった」と自覚することは、セルバンテス自身がそう自覚することなのである。ドン・キホーテの生涯の危機は、セルバンテス自身の生涯の危機にほかならない。もちろん、セルバンテスはここでギブアップするわけにはいかないから、「非現実の妄想」を生き続ける。つまり、ドン・キホーテを絶望の淵からなんとか救出しようとする。それが、《その臨終のドン・キホーテに向かってアルドンサは、プリーズ・サー トライ・トゥー・リメンバー ユー・ルック・アット・ミー アンド コール・ミー・バイ・アナザー・ネーム「お願い旦那様、思い出して、あなたは私を見て、違う名前と呼んだの」と呼びかける。》場面の到来である。《それでドン・キホーテは、自分の人生が妄想の塊りであっても、それが人にとってはなにか意味のあることだったと気づいて、最後の力をふりしぼって立ち上がる》ことができるのである。

セルバンテス自身に、ドン・キホーテに向かって「トライ・トゥー・リメンバー」と呼びかけるアルドンサのような女性（か男性）が生涯で登場することがあったのかどうかは、もちろんわからない。わからないけれども、自分にも「トライ・トゥー・リメンバー」と呼びかけるような、まだ見ぬ読者があらわれてほしいと切に願っていたであろうことは確かだ。作品の中でその願望を成就させているのだから。ドン・キホーテの前に遂にあらわれたアルドンサのような人物が自分の前にたとえあらわれることがなかったとしても、「所詮非現実の妄想の中」から「トライ・トゥー・リメンバー」と呼びかけること

をけっしてやめないし、その呼びかけの中からこちらに向かって「トライ・トゥ・リメンバー」と呼びかける声があられるのを待つこともけっしてやめない、とセルバンテスの声がこちらの「所詮非現実の妄想の中」で強く響き渡ってくる。

「トライ・トゥ・リメンバー」 - 「思い出そうとしてみて」という呼びかけがなければ、ふと立ち止まって誰も「思い出そうとしてみ」ることはないだろう。こちらから呼びかけないかぎり、向こうからその呼びかけが返ってくることもない。だがもう一度、一体なにを「トライ・トゥ・リメンバー」なのか。いま、「正義」の超大国アメリカが「悪の枢軸」イラクを激しく攻撃している最中である。吐き気を何度も催すような感覚の中で、「トライ・トゥ・リメンバー」と書きつけている。「思い出そうとしてみ」るほどのことがもしひとつも思い出すことができなければ、「思い出そうとしてみ」る場所にじっと立ち尽くそうではないか。まず自分自身に向かって深く「トライ・トゥ・リメンバー」と。いま「思い出そうとしてみ」ることのできるなにかが自分に突き上がってくるまで、この道義なき戦争に対する憎悪を自分の中で積み上げておかななくてはならない。「トライ・トゥ・リメンバー」 - 9・11テロを新しいテロの形態としてではなく、「新しい戦争」の出現と定義し、その定義の承認に世界中の人々がノンを突きつけなかった時点で、すでに9・11テロの「新しい戦争」は、もはや戦争としても成り立たない、アメリカによるアフガンへの、そして現在のイラクへの一方的な攻撃は始まっていたのである。「悪の枢軸」はイラン、北朝鮮も名指しされていたから、アメリカによる一方的な攻撃は、「悪の枢軸」を壊滅させるまで続行されることになる。「悪の枢軸」とアメリカとの戦いではなく、アメリカが「悪の枢軸」と指定したとき、すでにこれらの各国はアメリカによって暴力的に屈服させられる運命を負ったのであり、アメリカの国益の確保にとって障害となる国が、アメリカによって「悪の枢軸」と指定され、破壊されるという構図は、アメリカの国益の前に立ち足かかるどの国も、新たな「悪の枢軸」の烙印を押されるおそれがあるということだ。

一人ひとりを生きる具体的な個々人にとって、世界はこれまでも充分非道だったが、これからもっと非道になることは間違いない。その非道さはアメリカの道義なき攻撃が罷り通っているところにみられるだけでなく、それ以上にこの非道さに対して一人ひとりがますますウンともスンともいえないような、抗議の声一つ挙げられなくなっている、いや、挙げる気力すらなくなっている狭い場所に、武装解除されて閉じ込められている感覚からやってくる。抗議の声を挙げたければ反戦デモに結集して、大きな波のうねりを各国政府に示威してみせればよいということではない。我々の時間内勤務的ありかたの沈黙においてアメリカの道義なき攻撃とつながり、支えているにもかかわらず、我々は自ら武装解除された場所で世界でなにが起ころうとも、いつも通りの日常業務に明け暮れて一日一日を終え、満足そうに帰途に就く。この姿は誰のものでもなく、私自身の姿である。

ボスニア紛争を舞台に戦争の不条理を描いた映画『ノー・マンズ・ランド』の監督ダ

ニス・タノヴィッチがインタビューで、こう発言していたのが思い出される。そう、「トラ・トゥ・リメンバー」はつづくのである。

《サラエヴォでは、情報通信の手段がほとんどありませんでした。唯一見ることの出来たテレビ番組は、海外の紛争に関する報道を編集したものでした。この番組を見て、世界中の人々は僕たちのことを考え、生活はあちこちで中断し、戦いを終わらせるために、それぞれの指導者たちに介入を求める市民のデモが毎日行われると信じていたのです。

サラエヴォを発った時、本当の衝撃が待っていました。人生で最も恐ろしい日でした。僕は直ちに、人々は普通に生活し、散歩をし、海辺でくつろぎ、恋愛をしていると知ったからです。バカげていると思うでしょうが、僕は本当に愕然としました……。あなたがたが普通に過ごしていることは、考えてみれば当たり前なのですが、そういう僕も現在は普通に生活しています。こうしている間にも、ロシア軍はチェチェンに侵攻し、残虐行為を繰り返していますが、僕たちはくつろいで議論しているのです。》

《こうしている間にも、ロシア軍はチェチェンに侵攻し、残虐行為を繰り返し》、アフガンを制圧したアメリカ軍はイラクに入道的な空爆を大規模に展開している。ホントに《こうしている間にも》、正義の名のもとに大人も子供も家畜もどんどん殺されているのに、その地域以外では、《人々は普通に生活し、散歩をし、海辺でくつろぎ、恋愛をしている》。いまイラクに対してアメリカ軍が行っている攻撃は我々の日常生活にどんな翳りをもたらすことも、ごく微細な亀裂を生じさせることもない。だが先にもいったように、この事態がどれほど遠いところでの惨劇であり、我々の日常生活になんの影響も与えないようにみえても、我々に対する精神の武装解除は確実に加速しており、無力感は堆積されて「トライ・トゥ・リメンバー」と呼びかける声はますますか細くなっていく。

サラエヴォやチェチェンで殺戮行為が繰り返されている、アフガンを攻撃したアメリカ軍がいまイラクを猛攻撃中である、といったことはメディアで報道され、テレビで生中継されているから、誰もが皆「知っている」ことである。ただそれだけのことだ。「知っている」ことが各人になにかを促すわけでもないし、ある力を授けてくれるわけでもない。「知っている」ことは「知らない」こと以上に悪くなって、人々に却って無力感を植えつけるようになってしまった。「知っている」としても、なんにもならないのだから。更に「知っている」ことがよくないのは、「知っている」ことに覆われている大量の「知らない」ことに向かわせる衝動とは全く無縁であって、「知っている」ことでつねに済まされ、次々と通り過ぎていくだけのことだからだ。そういうことがあったことは「知っている」でなにかもが済まされて、「知っている」ということがどういうことであるか、が全く「知らない」場所に次々と閉ざされていく日常的な光景の中で、攻撃はたえず惹き起こされ、多くの人々の血が流されていることは、いつも「知らない」。

膨大な無関心によって成り立っている我々の日常生活、いや、膨大な無関心の中에서도かもはや嘗まれえなくなっている我々の日常生活は無惨であり、惨めという以外にない。

「トライ・トゥ・リメンバー」 - 辺見庸が『サンデー毎日』(03・2・9)で、イラク攻撃反対デモの呼びかけに応じて百人足らずの参加者を公園で待つ間、《犬の糞を踏んでしまった》友人のことを記している。《犬の糞を靴底につけたままのデモは、シユプレヒコールをするでなし、ジグザグ行進をするわけでなし、ジョン・レノンだかだれだかの曲をスピーカーから流して歩道をただぞろぞろ歩くだけの、うそ寒く、ひどくしょぼくれたものだったようだ。そうしたデモのスタイルは私の好みに反する。けれども、手紙の主がしらじらとした心をもてあまして、それでも最後までデモ隊とともに歩いたという貧寒とした風景を私は断じて嗤わない。嗤えもしない。

あんなものをデモンストレーションというのなら、私も昨年来、何度か有事法制反対の「デモ」なるものに参加し、かつてとの様変わりに驚き、砂嚙む思いどころか鳥肌が立つようなことも経験した。いったいどんな意味があるのか、動物の縫いぐるみをまとった者や看護婦に仮装した男が先頭で踊ったり、造花を道行く人に配ったり、喇叭や太鼓を打ち鳴らしたりという「デモ」もあった。あれが今風なのだといわれても私にはわけがわからない。示威行進のはずなのに、怒りの表現も抗議のそれもさほどではなく、なぜだか奇妙な陽気さを銜う、半端な祭りか仮装行列のようなおもむきのものが少なくなかった。児戯、滑稽、無惨、あほらしさ、恥ずかしさ、虚しさ……。いっそ隊列から抜けだしてしまいたい衝動に何度もかられた》。

口先だけの体制批判に花を咲かせている連中の馴れ合っている光景も虚しいが、《だが、同じく虚しい二つのことがらのどちらか一つと交わらなければならないとしたら、私としては迷いなく後者のそれをとる。つまり、冒頭の手紙の主のように、実際に犬の糞を踏む運命のほうを選ぶ。》と辺見庸は続ける。参加の基準はなにか。自分の中に貯め込むことのできる「虚しさ」や「惨めさ」の大きさであるにちがいない。おそらく「虚しさ」や「惨めさ」を回避して、いまなにかがなしうとは思われない。もちろん、「虚しさ」や「惨めさ」を引き受けてもなにも出来ないかもしれないが、「虚しさ」や「惨めさ」を積極的に引き受けて、へこたれずに歩みつづけること自体がなにごとかであることは間違いない。世界は「虚しさ」や「惨めさ」の中で悶絶しているだろうからだ。デモの「虚しさ」や「惨めさ」は我々の日常生活なるものの「虚しさ」や「惨めさ」が正確に投影されたものであるかぎり、やはり回避してはなにもものも生みだされないだろう。

《いま、デモにおける「大きな愉悦」など望むべくもない。抵抗の水位が下がっているどころか、まるで干潟のようなところで闘わざるをえないのだから。あるのは「苦い自覚」のみである。しかしながら、抵抗の規模がどうあれ、「愉悦」などという独り善がりというか錯覚よりも、「苦い自覚」のほうが、抗議行動のいかなる局面にあってもよほど大切なことではないだろうか。往時、しばしば勘ちがいでデモの「愉悦」に浸ったこともある私などは現時点ではそう痛感している。なまじいとき「愉悦」や「至福」などを感じていたから、この国の抵抗運動は今日のていたらくとあいなったのではない

か。逆にいえば、閑散とした集会場所で犬の糞を踏む虚しさこそがたしかな感覚なのだ。それでも抵抗を諦めない、いわば<虚しさを底に溜めた冷めた意思>のほうが、いつにあっても、「愉悦」よりは正確であり、ときに戦闘的になりうるのである。》

しかし、《往時、しばしば勘ちがいしてデモの「愉悦」に浸ったこともある私など》の一人としていわせてもらうなら、デモなどは往時も今も、抗議行動であった試しがない。抗議行動の身振りはあるけれども、残念ながら、そこには闘いなるものは内在していない。自分の場所での闘いが欠損しているからこそ、デモなどに走るのである。つまり、デモへの参加は自分が存在する場所での闘いの欠損の投影された動きにほかならない。本来なら、どこか一箇所に集まって周辺をだだだ歩き回ったりするような無様な真似をせずに、自分の立っている拠点で狼煙^{のろし}を揚げればよいのだ。自分の外にあるデモになんか出かける必要はないのだ。だが悲しいかな、自分の立っている拠点なんぞ、どこにも見当たらないし、自らの抵抗の拠点を構築するようしてこれまで生きてこなかったのである。生きるということが抗することであるような、緊張感を孕んだ日々をつくりだしてきたことは……なかった。身も心も武装解除され尽くした日々のなかで、目に見える遠くの、いつだって遠くの戦争がメディアで報道されて、ふと思いついたように起ち上がろうとしても、起ち上がらなくてはならない自分の拠点というものが深く見失われてしまっていることに、もしそうであるなら改めて愕然とするところからデモは始まらなくてはならないのである。

辺見庸のいう「苦い自覚」とは、《抵抗の水位が下がっているどころか、まるで干潟のようなところで闘わざるをえない》こと以前の、自分の立っている場所が底無しの空虚に呑み尽くされていることへのまなざしの内に宿されるものでなくてはならない。そこまで下降するなら、「苦い自覚」は《干潟のようなところで闘わざるをえない》と知っていること自体が勝手な思い込みであることを気づかせてくれる筈だ。したがって、《閑散とした集会場所で犬の糞を踏む虚しさこそがたしかな感覚なの》ではない。デモの虚しさのなかにくっきりと浮き彫りにされている自らの抵抗の拠点での自分自身の不在に向き合うかぎりにおいて、《たしかな感覚》となりうる筈だ。デモの虚しさに佇むことでもなく、デモの虚しさに耐えることでもなく、デモの虚しさが唯一自分が闘わなくてはならない<現場>の構築に向かわせてくれるようになることが、「苦い自覚」に与るための尖鋭化なのである。

絶望は深すぎる、のかもしれない、喪失の深さに合わせて。我が抵抗の拠点の構築などという<遠い夢>を今の時代に語りだすなら、どれほどの苦さを全身に浴びなくてはならないか。欠損も不在も続くし、深化していく。だからこそ、デモの虚しさを噛みしめるだけにとどまらず、その虚しさを不断に突きだしてくる淵源への凝視を持続するためにこそ、デモの虚しさにつながれていなければならない筈である。そうであれば、《まるで干潟のようなところで闘わざるをえない》とか、《それでも抵抗を諦めない、いわ

ば<虚しさを底に溜めた冷めた意思>のほうが、いつにあっても、「愉悦」よりは正確であり、ときに戦闘的になりうる》などと、逆の方から自分を浅瀬に押し上げる必要はないではないか、辺見さん。《戦闘的になりうる》のは、虚しさがやってくる方向を目指して一歩でもにじり寄っていく姿勢としてかたちづくられていくものではないか。

「苦い自覚」とは全く無縁なデモ行進が、《示威行進のはずなのに、怒りの表現も抗議のそれもさほどではなく、なぜだか奇妙な陽気さを銜う、半端な祭りか仮装行列のようなおもむき》を呈することのうちに、《昨今のデモのあんなにも穏やかで秩序に従順な姿、あれは果たしてなにに由来するのであろうか。あたかも、犬が仰向いて腹を見せ、私どもは絶対にお上に抵抗いたしませんと表明しているような(...)暴力よりはるか以前の自己消費と自己満足、小さな愉悦のようなもの》が充満していくことになるのは、必定である。《なぜあそこまで「健全で穏和な市民」を装い、非暴力と無抵抗を誇る必要があるのか。》と辺見庸は憤るけれども、抗議行動としてのデモの意味あい以上に、抗議行動の不在の形態としてのデモ行進への「苦い自覚」をも欠損させていくなら、抗議行動としての本来の意味を喪失していくことになるのは、当然であろう。

《武断政治を旨とする巨大国家の途方もない暴力を前にして、ジョン・レノンやらP・P・Mやらの底の浅い感傷など米英列強の暴虐に対する別の意味の肯定のようなものですらある。》と彼が書くのはしたがって、然り、といわなくてはならない。全く《別の意味の肯定》になってしまっているのだ。こうなると、そんなデモに対するデモが突き出されてこなくてはならなくなる。そう、デモへの参加に内在する「苦い自覚」は、こんな体たらくなデモに抗議するデモにも向かわなくてはならない。参加者個々人の抵抗の拠点づくりを目指して。《イラク攻撃と有事法制に反対するあらゆる表現はもっと冷静に戦闘化すべきだと私は思う》としても、たとえイラク攻撃や有事法制がまだ目に見えていなくても、自分の手で驚掴みにしなければ生きるに値しないと思われるような、自分が全体として存在できる固有の課題を見出そうとするたたかいの中で、まだ見ぬイラク攻撃や有事法制への抵抗を着地させていくことこそが、真に戦闘的なのではないか。

デモに参加すること以上に、デモの参加によって隠蔽されてしまう非常に重要な課題への非参加のほうが大きな問題であるのはいうまでもない。デモへの参加がそのことによって隠蔽されている課題への参加と重ならないことが、抗議行動の対象として浮かび上がっている存在様式と通底してしまうことを促すのである。《別の意味の肯定》であり、なによりもデモに参加する自分自身が肯定されてしまっているのだ。何層もの肯定に包まれたデモ参加に対する疑問が「苦い自覚」として尖っていくなら、そんなデモからさえはじかれてしまう「苦い自覚」も他方に尖っていることもありうるけれども、いずれにしても「苦い自覚」は「苦い自覚」のうちに停滞せずに、自分にとっての本来的な場所を持たなくてはならない。

辺見庸が書いていることで唯一救済される必要があるのはしたがって、デモ行進への

参加なぞではなく、「苦い自覚」そのものであり、「苦い自覚」の行き着く先であろう。「苦い自覚」は自分の外へ向かうよりも、自分の内へと向かい、自分の足許を一挙に照らしだそうとするから、「苦い自覚」なのであり、たえまない疼痛を感じなくてはならないのである。お前がどのようなことを考え、なにを言い、行動しようとも、所詮片寄った世界の中に置かれている限りでの思索であり、発言であり、行動にしすぎないという「苦い自覚」の底を何重も潜りながら、尖鋭化されていく疼痛を積極的に引き受けることによって、世界の片寄りに対峙していくことが誰にも問われているにちがいない。その一端として、《9月11日事件からガザ地区の空爆に至るまで》の一年足らずで、《戦争の語り方の、途方もないほどの片寄り方》を指摘しているのは、『朝日新聞』(02・7・30)での東大教授藤原帰一の論壇時評である。もちろん、かつても、いまも、これからも、《戦争の語り方の、途方もないほどの片寄り方》に些かも変化はないし、現在進行形のイラク攻撃の映像の大部分がアメリカのCNNテレビのものであり、米英軍の従軍記者たちによる報道からも、その点は明らかである。

《CNNが世界貿易センターの崩壊を繰り返し放映するとき、アルジャジーラは空爆下のアフガンの村を映していた。観衆が同情を寄せる犠牲者が映され、「やつら」の犠牲は語られないのである。/そして、それぞれが「自分たち」の犠牲を正面に掲げ、「やつら」への暴力を正当化する。事件の解釈が一つに片寄るように、とるべき手段にも疑問は許されない。片寄った語り方が、片寄った正義と暴力を支えるわけだ。》その理由について、《アメリカの歴史家キャロル・グラックは、「わたしはアメリカのテレビに捕らわれた身である……ほとんどのテレビはいまだに国民国家を中心にすえた限定された存在である」という(「9月11日 21世紀のテレビと戦争」現代思想7月号)。ここでは英雄と悪玉を区別する「英雄物語」へと「事件の物語」が集約され、そこから「善が勝利する」「戦争の物語」がつむぎだされていく。国民と英雄と正義に彩られた物語が、他の語り方を排除してしまうのである。》

イラク攻撃の現況を映し出すテレビ自体が、攻撃するアメリカ軍側の「片寄った語り方」と片寄った映像で覆われているために、視聴者は攻撃されているイラク軍側の「片寄った語り方」と片寄った映像で覆われた別のテレビや、アメリカ軍側でもイラク軍側でもない、戦闘に巻き込まれて死傷していくばかりの膨大なイラク民衆の視点で映し出されるテレビも見て、この惨劇に対して公正な判断を養いたいと思っているが、アメリカ軍側のテレビ以外の放映が視聴者に届くことはない。では、どうすればよいのか。アメリカ軍側の片寄った立場を映し出すテレビを見ながら、視聴者はイラク軍の片寄った立場やイラク民衆の立場をたえず想像しながら、見る以外にない。つまり、攻撃しているアメリカ側の《国民と英雄と正義に彩られた物語が、他の語り方を排除してしま》っていることに覚醒しつつ、いま見ているテレビとは別の異なるテレビを自分の頭の中に映し出さなければ、一方的なCM映像と語りの中に囚われてしまうのは避けられない。

《片寄った語り方の反面が、語りたくないことから目を背けることだろう。荻部直は、9月11日事件直後には過熱した「報道と言説」がいまでは「すみやかな忘却」に転じたことを捉え、そこでは「日常の世界をつきやぶる『現実』」の恐ろしさを実感した人々が、その「現実」離れを「忘却することで隠蔽してしまった」のではないかと、いう（「混沌への視座 - 国家と暴力をめぐる」アステイオン57号）。》というより、《「すみやかな忘却」に転じ》ることが予め前提とされているような「報道と言説」であり、自然過程としての「すみやかな忘却」にいくらかでも抗するところでの「報道と言説」でありえないのは自明であろう。イラク攻撃の「報道と言説」においても、これまで繰り返されてきたことが同じように繰り返されるだけであるのはわかりきっている。反戦デモの繰り返しと同様に。

《都合のよいところだけを覚え、見たくないものは忘れてしまう。》ようにしてこれまで生きてきたし、今後も行き続けていくだろうから、《片寄った戦争の語り方》から抜け出すことができないどころか、繰り返しのうちにそのことへの「苦い自覚」もすり減らしていく。《時間が経ってから戦争が忘れられたのではない。見たくないものについては、早い時期から目をつぶってきたのだ。》もっと正確にいうなら、「すみやかな忘却」はすでにその最中から生じており、時間の経過は忘却の揺りかごにほかならない。だから、「トライ・トゥ・リメンバー」の呼びかけをたえず自分の胸中に燃やしつづけるだけでなく、あらゆる関係の中で響かせつづける戦闘を組織しなければならない。

藤原帰一による時評は、極限まで突き進もうとする「世界正義のアメリカ化」が、《戦争犯罪を中核として大量虐殺などの罪を裁く》国際刑事裁判所の設立規程の批准をアメリカ政府が拒否するまでに至ったことを取り上げて、こう書いて締め括る。《力があれば現実から目をつぶり、裁きも受けなくてよいという世界が生まれる。過去と現在の戦争の覚え方を見てわかるのは、国民が耳に心地よい物語を選んで伝えるのが戦争の記憶というものだ、そして戦争の正義とは勝者の正義なのだ、という荒唐した結論に過ぎない。

力が正義に反するとは限らない。だが力が正義と同じものにされるとき、正義の信用も失われる。正義の戦争をうたいながら、9月11日事件と対テロ戦争は、国際政治における公共性や正義を壊してしまったのである。》

8カ月前の時評であり、対テロ戦争はイラク攻撃にまで予定通り行き着いているが、時評の命脈は十分保たれている。問題の核心を掠め去っているからだ。つまり、この時評からも「トライ・トゥ・リメンバー」の呼びかけが響いてくる。これまで書き綴ってきた文章群も、いま書き連ねられているこの文章も、「トライ・トゥ・リメンバー」の呼びかけを自分に向かって、これを目にする人たちに向かって掘り起こす作業であることが、そして生きることは「トライ・トゥ・リメンバー」の呼びかけを持続することのうちにかたちづくられていくものであることが、いまはっきりと伝わってくる。

2003年3月27日記

